

岡山短大(倉敷市有城)
幼稚教育学科の学生が、

交通安全教育や救命救急講習などを通じて命の大切さを学ぶ「人命尊重マインド養成支援プログラム」に取り組んでいる。子どもが巻き込まれる事故や事件が後を絶たない中、幼児の命を守れ

る保育者を目指す試みだ。

同プログラムは、若者の交通事故死者や自殺などが増加傾向にあることから、学生に命の重みを理解してもらおうと同短大が導入。昨年八月、中国四國の短大で唯一、国

の財政援助を受けられ

る学生支援事業に選ばれた。

本格的にプログラムが始まった十一月下旬、一年生百四人が三重県の鈴鹿サーキット交通教育センターで宿泊実習。危険運転体験などを通じて交通事故の怖さを知り、児童を対象にしたクイズ形

式の交通安全教育の仕方などを学んだ。保育士を目指している松尾麻衣さん(左)は「保護者の送迎や園外で遊びに行く時など幼児も車社会の一員だと分かった。将来、保護者や保育士とともに事故防止の輪を広げられる」と話す。

命守れる保育者に



「命の資料室」で、AEDや人形を使って救命救急法などを学ぶ学生

学内には活動拠点となる「命の資料室」を設置し、保育現場で急病などがあった場合に対応できるようAED（自動体外式除細動器）の使用方法や、乳幼児の人形を用いての救命救急法などの実技を身に付ける。プログラムは卒業までの二年間を通して行われ、今後交通事故被害者らを招いての講演会をはじめ、命の大切さを伝える紙芝居やオペレッタの制作など啓発活動にも取り組む予定。

プログラムに参加している沖晃一さん(左)は「事故や家庭内の虐待など、保育現場以外にも子どもを取り巻く危険はある。万が一の時に子どもの命を守れるようになりたい」と話している。(天津雄一郎)

岡山短大で交通安全教育やAED実習 支援プログラム

風見しんごさん

命の貴さ訴え

倉敷岡山短大で講演
交通事故で長女を亡くしたタレントの風見しんごさん(四十五)が五日、岡山短大(倉敷市有城)で講

演し、保育者を目指す学生に事故の悲惨さや命の貴さを訴えた。

事故や事件から幼児の命を守れる保育者を育てる同短大の「人命尊重マインド養成支援プログラム」の一環で、同短大と併設の岡山学院大の学生、市民ら計約四百三十人が登校中に事故に巻き込まれた風見さんは「事故は人も時間も場所も選ばず、日常生活の中で突然起る」と強調。

警察の捜査や裁判などで事故を思い出させる日々が続き、家族や長女の同級生に苦しみが広がったことなどを声を詰まらせながら振り返り、「幼い子どもを亡くすつらさを、ほかの人には味わせたくない」と語った。



事故の悲惨さや命の貴さを学生に訴える風見しんごさん

言一言に学生たちは真剣に聞き入り、目頭を押さえた姿もあった。四月から保育士として働く同短大幼稚教育学科二年、瀧島和穂さんは「交通安全の大切さを子どもに教え、自分も車の運転など注意したい」と話した。

(天津雄一郎)

保育者をめざす学生に交通安全教育を通じて、命の大切さを考えてもうつ

岡山短期大学幼児教育学科（岡山県倉敷市）では学生のために「人命尊重マインド養成支援プログラム（平成19年文部科学省学生支援GP選定）」という取組みを行っている。同プログラムは人命尊重の心と自尊感情との育成を図り、社会の中で自ら進んで他の安全確保と救命に貢献し、また自信を持って保育の仕事に当たることができる有能な保育者の養成を目的としている。この取組みの中には体験型学習による交通安全教育研修がある。

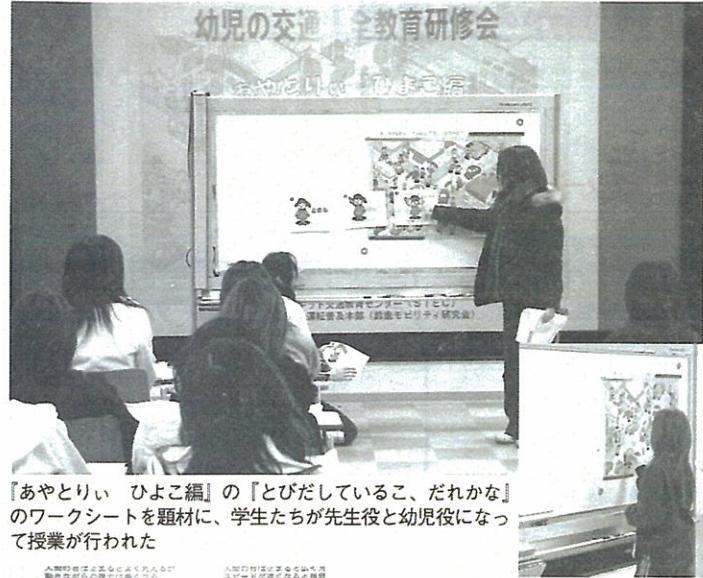
昨年11月21日と22日、鈴鹿サーキット交通教育センターで岡山短期大学幼児教育学科1年生104名が交通安全教育研修に参加した。この研修は座学と実技で構成されている。

座学では鈴鹿モビリティ研究会のインストラクターによる幼児への交通安全教育^{※1}マにした講義が行われた。「幼児は一人で道路を横断しようとする時にミスをして、事故にあってしまうことが多い。こうしたミスを防ぐことが交通安全教育の目的です。また、

幼児の段階から交通道徳・ルールを教えることで、将来のより良い交通社会人を育てる」とができます」とインストラクターが説明。「幼児に安全確認の方法を教える時、「止まる」と「左右を見る」を同時に練習するとなかなか身につきません。まず、歩いて止まることを繰り返し練習させてください。その後に左右を見ることを教えてあげた方が効果的です。止まることで気持ちが落ちつき、周囲をきちんと

TRAFFIC ADVICE [岡山短期大学]

★交通安全活動をサポートする



『あやとりい ひよこ編』の「とびだしているこ、だれかな」のワークシートを題材に、学生たちが先生役と幼児役になつて授業が行われた



チャイルドビジョンを使って、幼児の視野の狭さを体験

想を語った。
自分の安全運転意識も高まったように思
います」と研修の感

学生を引率した岡山短期大学講師の山口直範さんは「学生たちは実践的な幼児への交通安全教育を学ぶことができました。これを活かして、現場に出た時、子どもたちに命の大

※1 鈴鹿モビリティ研究会=鈴鹿市とHondaが、将来のより良い交通環境づくりとともに進めることを目的として1993年に設立され、道路環境の改善や交通安全プログラムの開発、教育の実施などを行っている。

※2 チャイルドビジョン=幼児視界体験メガネ。以下ホームページからダウンロードが可能。<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/partner/>

※3 あやとりい=鈴鹿モビリティ研究会が開発した交通安全教育プログラム。小学3・4年生向けの「あやとりい」、幼児向けの「あやとりい ひよこ編」、小学生向けの「あやとりい 自転車教室」、高齢の歩行者・自転車利用者向け「あやとりい 長寿縄」がある。あやとりいは「あんぜんをやさしく ときあかし りかいして いたく」の略。詳細は以下ホームページを参照。<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatori/>

次は、「あやとりい ひよこ編」の一部をインストラクターが実演。その後、学生が先生となつて「とびだしているこ、だれかな」のワークシートを使って授業を行う。先生役になつた学生がボードに貼られたイラストを指して、「この絵の中に、道路に飛び出している子どもはあるかな?」とその他の学生たちに聞いかける。学生の一人は前に出てサッカーボールを追いかけて車道に飛び出そうとする子どもを指した。先生役の学生が「この子はどうすればいい?」と尋ねると、「止まる」という声が学生たちからあがる。幼児には道路を渡る時、「止まる」「渡る合図(手をあげる)」「左右を確かめる」「渡る」という手順で教えることを全員で確認して座学は終了した。

一方、実技はセンター内のコースで、自動車免許を取得している学生は四輪研修、それ以外の学生は二輪研修として、学生たちが自転車原付を運転し、急制動やスラローム走行などに取り組んだ。

学生を引率した岡山短期大学講師の山口直範さんは「学生たちは実践的な幼児への交通安全教育を学ぶことができました。これを活かして、現場に出た時、子どもたちに命の大

切さを伝えられる保育者になつてほしいと思

います。また、実技での体験を通じて、自分を守るだけでなく、自分が交通事故の加害者にならない

ための安全運転意識も高まったように思
います」と研修の感



四輪研修ではインストラクターが安全でスムーズなハンドル操作を指導



死角にいる二輪車に注意するなど、安全な交差点の右左折の仕方を運転しながら学ぶ